

# 日英語比較の一視点

日本文学の英訳を中心に

小澤悦夫

## 0. はじめに

日本語と英語の比較研究に関しては、統語論を中心に構造言語学の時代から生成文法の現在まで、無数といってよい研究がなされてきている。しかし、これらの研究は特に理論的な色彩が強く、日本語的な表現が英語ではどのように表現されているか、という観点からの研究はあまり含まれていない。それまでの成果を取り入れて、理論面と実際面を含んだ国広（編）（1980-82）などがあるが、この視点はむしろ翻訳論の一部として扱われてきたと言える。例えばサイデンステッカー・那須（1962）やサイデンステッカー・安西（1983）などがそれにあたる。

「日本語的表現」の典型として日本文学作品に見られる日本語を材料とした場合、その英訳表現との比較が興味深い研究になるだろうという予測は当然立てられるが、この視点からの言語学的研究は比較的数少ないと言える。ある程度理論的な研究と言えば最近では巻下（1999）くらいしか見当たらない。

しかし、純理論的な日英語比較研究とは違い、外国語としての英語の理解、および英語研究から見直される日本語の性格の再認識、を深める意味では日本文学に見られる日本語とその英訳との比較は貴重な視点を与えてくれるもので

ある。英語学習の場にも裨益するものがあるだろう。本稿では、もとより断片的な扱いかいにならざるをえないが、構文と発想・文化の2点に分けて概観してみたい。

## I. 日英語の構文比較

### 1. 文法的主語

日本語と英語でそれぞれ文を構成するときに主語として何を選ぶかは、情報構造上の配慮が必要なことは勿論だとして、基本的な文構造の点からも両言語は様々な違いがある。その一番大きな違いが生じる部分が、英語は語順がはっきり決まっている言語なのに対して、日本語の語順がかなり自由なところにある、ということもよく知られている。

非人称主語構文がその代表的な例なのも言うまでもない。「何が彼女をそうさせたか」などという表現は日本語になかったが、“What made her do so?”の直訳が新鮮な感覚をもたらし、小説そのものも評判になったのはその一例である（藤森成吉「何が彼女をそうさせたか」1927年）。「これは憐れな状態である以外の、何物でもないではないか」「What else have I got? What else besides this misery?»（「馬車」）もその一例。これは新感覚派に見られる文字通り当時としては新感覚の表現だが、この類の直訳的表現は今に至るまで熟した日本語にはなっておらず、自然な日本語として定着したとはとても言えないことも明らかであり、動作動詞を使った文では人間ないし有生主語（animate subject）が主語として使われるのが通例である。次はその一例である。

- (1) a. ケースを絨毯の上に置き、もどかしげに留金はずそうとしたが鍵がかかっている。

Her trembling hands swiftly sought the catch — but it was locked!

（『幻影』）

- b. 親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。

Ever since I was a child, my inherent recklessness has brought me  
nothing but trouble. (『坊っちゃん』)

主語を省略する(もしくは表現しないで済みます)のも日本語の特徴だが、ここで見られるように、(1a)では、主語は原文には現われていない無生(inanimate)の“hands”に変えられており、「震えている手」に焦点があたることで、主人公のあせり具合があざやかに表現されている。(1b)では、“my recklessness”を主語とすることで、それが苦勞の元になっているという両者の関係がより明らかになっていると言える。

次の例もこの構文の典型である。

- (2)a . 何だか生徒全体がおれ一人を探偵しているように思われた。くさくさした。

The thought that the whole school was ganging up to spy on me  
was depressing. (『坊っちゃん』)

- b . 子よりも孫の方が可愛らしい、そう思うと、その日一日彼は塞いでいた。

Her grandchild's more important than her son. The thought  
troubled him all day. (『御身』)

誰がそう考えているかは、(2a)では“me”、(2b)では“him”という代名詞が、その主体を示すことになる。

- (3)a . こうやって芸者衆の三味線を聞いていますと、じれったくなったりして、はい。

It makes me very impatient to hear them playing.

- b . (女は)「悲しいわ」と、ただひとこと言っただけであった。

“This makes me very sad.” She said only that. (『雪国』)

これは、どちらも隠れている主語は「私」だが、(3a)では場面から三味線を聞いているのは私だとすぐにわかるし、(3b)では、「私は悲しい」と主語

を出すほうがむしろ芝居がかっておかしく響くだろう。そのような状況を形式主語の *it* や外界照応 (exophoric) の代名詞 *this* を使うことで英語として自然な構文に移している、といてよい。

- (4) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

The train came out of the long tunnel into the snow country.

(『雪国』)

これはサイデンステッカーの名訳として知られているものだが、原文では、トンネルを抜けたのは汽車が自分(乗客)が分からない。というよりも、我々は主語が汽車が自分か、などはそもそも気にしていない(だから表現しない)のである。しかし、英語では主語を選ばないと文がつかれないし、その場合、主語として“train”を選ぶか“we”を選ぶかは文学批評家も兼ねる翻訳者の判断次第ということになる。この場合は、(1)と同じように、モノである汽車を主語に立てることにより、場面の移り変わりや雪国のイメージを鮮やかに示している。なお、“Our train(我々の乗った汽車)”とせず、“The train”とあくまで、人間を介在させない形にしているのも細かな配慮が払われているところと言える。ただし、原文では、「雪国であった」と主人公の感慨が込められているのが英訳ではすっぱりと抜けてしまっているが、ここは翻訳の宿命と言うべきところで、実際にも川端康成の原文に見られる登場人物の感慨をすべて翻訳に移そうとするのがもともと無いものねだりであろう。川端の表現には、主語・目的語・修飾語の論理的関係などの配慮がほとんど見られない箇所が多すぎるのである。だからこそ「日本的」な作品になっているとも言える。

英語では、主語を選ばなければ文がつかれない、という点は、英語を使う時、特に英語を書く時の注意事項で、(5a)では「自分=私(I)」が主語だとはすぐに分かるが、(5b)、(5c)で“*They*”を主語に選ぶのは英語の発想をよほど身につけていないと浮かばないだろう。

- (5)a . あくる日眼が覚めてみると、身体中痛くて堪らない。

Next morning when I opened my eyes I found that I ached all over.

b . 靴は磨いてなかった。

They hadn't cleaned my shoes.

c . よく先生が品切れにならない。

It was a wonder that they didn't run out of teachers.

(『坊っちゃん』)

これは、総称人称 (generic person) として “they” を選んだ例だが、次の訳では “you” を使っている。

(6) 冬でも泳げるんですか。

You can swim in the winter, too?

(『踊り子』)

総称人称 (we/you/they/one) ならばどれを使ってもよいわけではなく、(5b) と (5c) は “they” 以外は不自然になる。もっとも(6)のように、相手に面と向かって訊くのであれば (5c) も “It is a wonder that you don't run out of teachers.” となりうるのは言うまでもない。その代名詞が本来もっている意味は残るのである (cf. Quirk et al. (1985, p. 354): “Although used generically, these personal pronouns *we*, *you*, and *they* retain something of the specific meaning associated with the 1st, 2nd and 3rd persons respectively.”)。 “One” であれば、「人は」という漠然とした意味で使うのは勿論だとしても、「私は」という意味合いが隠れていて、控えめに自己主張していることもある (だから場合によると、もったいぶったり威張ったりしたニュアンスが生じる)。次は「私は」という意味合いが感じられる例である。

(7) しかし、無論その答えだけでは承知が出来なかった。

Of course one couldn't accept an answer of that kind as any sort of evidence.

(『御身』)

## 2. 人称代名詞の役割の違い

鈴木(1973)で指摘されているように、英語の一人称代名詞(I)は「今話しているのは自分」であり、二人称代名詞(You)は「今わたしが話しかけているのはあなた」である、という役割を示すのみで、人称代名詞自体に特別な社会的意味合いは含まれていない。しかし、日本語ではこの意味での人称代名詞は存在せず、自分と相手を指すことばは必ず両者の社会的関係を示すことになる。特に、三人称代名詞(he/she)にあたる「彼/彼女」は翻訳調が依然として抜けていないので様々な名詞表現が使われ、その一つ一つに微妙なニュアンスが含まれることになる。

- (8) a. 「いけない。いけないの。お友だちでいようって、あなたがおっしゃったじゃないの」と、幾度繰り返したかしれなかった。...

酔いで半ばしびれていた。

「私が悪いんじゃないわよ。あんたが悪いのよ。あんたが負けたのよ。あんたが弱いなのよ。私じゃないのよ」などと口走りながら、よるこびにさからうためにそでをかんでいた。

..She repeated over and over, he did not know how many times:  
“No, no. Didn't you say you wanted to be friends?”...

She was still half numb from the liquor.

“It's not my fault. It's yours. You lost. You're the weak one. Not I.”  
She ran on almost in a trance, and she bit at her sleeve as if to fight back the happiness.

- b. 菊勇ねえさんがいなくなると、私は寂しいんです。...ねえさんもかわいそうな人なの。

I'll be lonely without Kikuyu..Kikuyu is a very sad case.

- c. 「駒子が憎いって、どういうわけだ」

「駒ちゃん？」と、そこにいる人を呼ぶかのように言って、葉子は

島村をきらきらにらんだ。

「駒ちゃんをよくしてあげてください」

“Why do you dislike Komako, then?”

“Komako.” She spoke as if calling to someone in the same room, and she gazed hotly at Shimamura. “Be good to Komako.” (『雪国』)

日本語では相手を呼ぶのに、「島村さん」と言うか、「あなた」と言うか、「あんた」と言うかで両者の心理的・社会的関係が変わってしまう。(8a)の最初に「あなた」と呼びかけたのが、少し後で酔いに負けた時は「あんた」とずっとなれなれしい呼びかけになっており、駒子の切なさが露わに読み取れる。しかし、英訳では言うまでも無くすべて“you”であり、この間の感情の変化は一切代名詞からは窺われない。

三人称でも事情は同じであり、(8b)で「ねえさん」と呼ぶ時の両者の関係は“Kikuyu”からは読み取れない。英語にも縮小辞 (diminutive) はあるが、日本語を知らない読者には「駒子」と「駒ちゃん」のニュアンスの違いは理解しにくいだろう。だからこそ訳者もしいてこの違いを出さなかったと思われる。

### 3. 呼びかけ

主語から呼びかけ語まではほんの一步だから、ここでも日英語の違いが見られるのは当然でもある。

(9)a. 紙屋さん, 紙屋さん。

Hey, Mr. Paper Dealer! (『踊子』)

b. 娘は窓いっぱいに乗り出して、遠くへ叫ぶように、

「駅長さあん、駅長さあん」

Leaning far out the window, the girl called to the station master as though he were a great distance away. (『雪国』)

c. 学生さん, 東京へ行きなさるだね。あんたを見込んでたのむだが

ね…

You're a student, aren't you? Going back to Tokyo? I think I can trust you. (『踊子』)

d. 「ねえさあん」と呼ぶ声が、その荒々しい響きの中を流れて来た。

黒い貨車の扉から少年が帽子を振っていた。

「佐一郎う、佐一郎う」と、葉子が呼んだ。

“Yoko, Yoko..” A boy was waving his hat in the door of a black freight car.

“Saichiro, Saichiro,” Yoko called back. (『雪国』)

日本語では職業名を呼びかけとして使うことが一般化している。これは、社会的な関係を確認することで、相手に対してどのような言語表現を使えばよいかを確認することである。英語でも職業名を呼びかけとして用いることはむしろあるが(“Driver!” “Waiter!” など)、日本語ほど普通に見られるわけではない。これは、英語社会では、職業とは関係なく、あくまで独立した人間同士として様々な社会的場面で対応するのであって、職業というレッテルを相手に貼った上でないとはどのような言語表現を使っていいかわからない、などということがないからだろう。(9a)の“Mr. Paper Dealer!”は直訳すぎて英語としては不自然と言うしかない。英語としては、(9b)のように省略する方がむしろ自然だろう。(9c)も同じで、“Student!”と呼びかけるのは英語ではないから「学生だね」と自然な表現に置き換えているのである。

また、日本語では年上の親族に親族用語で呼びかけるのはいいが、年下の者に親族用語で呼びかけるのは例外的だということを含め、親族用語の呼びかけの仕組みは鈴木(1973)で明らかにされた通りだが、この点も英語と違う。“Sister”とは呼ばないで、名前を呼ぶのである。親には“Father!” “Mother!”の類で呼びかけ、きょうだいには名前前で呼び合うところに日本の家族とは違う仕組みが見て取れる。



(10) a . お爺さん，おだいじになさいよ。寒くなりますからね。

“Please take care of yourself,” I said to the old man. “It’s going to get colder.”

b . あんな者，どこで泊まるやらわかるものでございますか，旦那さま。

There’s no way to tell where people like that are going to stay, is there, young man? (『踊子』)

c . お客さんおめがたかいねえ。

An excellent choice, Madame. (『シャドウ』)

これらの呼びかけは，英語では基本的には“sir”か“ma’am”になるところだろう。相手が年下であっても，自分より社会的地位が低いと推定される場合でも，見知らぬ相手に敬意を表する（もしくは，建前上は自分と同じ独立人格として対する）のが英語社会のスタンスである。日本語では相手の社会的位置を確定しないとコミュニケーションが成り立たない（成り立ちにくい）のも<sup>(10)</sup>に見られる通りである。ちなみに，英語では苗字だけで呼びかけるのは，軍隊とか，親しい男同士などで時折見られるが，女同士，もしくは男女間ではまず見かけない用法である。だから，次の英訳は，葉子の悲しい気持ちがあったく伝わっていないことと合わせて，不十分な翻訳となっている。

(11) 一時間ほどすると，また長い廊下にみだれた足音で，あちこちに突き当たったり倒れたりして来るらしく，

「島村さあん，島村さあん」と，かん高く叫んだ。

「ああ，見えない。島村さあん」

An hour or so later, he heard uneven steps coming down the long hall. She was weaving from side to side, he could tell, running into a wall, stumbling to the floor.

“Shimamura, Shimamura,” she called in a high voice.

“I can't see, Shimamura!”

(『雪国』)

#### 4. 時制・相

英語では、完了形・進行形という文法形式が存在しており、それに現在・過去・未来という時制 (tense) が一々対応しているが、日本語にはたとえば過去完了形という形式は存在しないので、日英語の対応関係はそのつど時制を確認することになる。

- (12) a. そして静かな声で、八月いっぱい神経衰弱でぶらぶらしていたなどと話しはじめた。

All through August she had been near nervous collapse, she told him quietly.

- b. ちょうどそのころは雪がいちばん深い時であろうから、島村は鳥追いの祭りを見に来ると約束しておいたのだった。

It was then that the snow was deepest, and Shimamura had told Komako he would come for the festival.

- c. いつのまに寄って来たのか、駒子が島村の手を握った。

Komako had come up to him, he did not know when. She took his hand. (『雪国』)

日本語では、時間の前後関係は文脈から分かるときは、(10a, c) のように、特にその前後関係を際立たせることはしないのが通例である。しかし、英語では、「話したときよりも神経衰弱だったときの方がより以前」だとか、「気がついたときには既に近寄っていた」ことを表現するときは過去完了形が必要となる。もしここで単純過去形を使えば英語としては不自然になる。日本語で、どうしても過去の過去を表わしたいときは、(12b) のように「のだった」という念を入れた言い方をするしかないだろう。次は同じ例である。

- (13) a. 私はそれまでにこの踊子たちを二度見ているのだった。

I had seen this troupe twice previously. (『踊子』)

b. しかし、この祖父の姿は私の記憶の中の祖父の姿より醜かった。私の記憶は十年間祖父の姿を清らかに洗い続けていたのだった。

But the image of my grandfather here was much uglier than the one in my memory. Memory had purified my grandfather's image over the years. (『日記』)

次の例のように、日本語では単純過去形で表しているところを英語では過去完了形で完了の意味を強調することもよくある。

(14) あの哀れな原稿を見て、宗方豊子に対する羨望や劣等感はあとかたもなく消えてしまったが、...

All the trace of envy or sense of inferiority towards Toyoko Munakata had melted away on seeing those pitiful manuscripts,...

(『幻影』)

次は日英語で発想が違う例である。

(15) あなたは不幸な方だね。

You've been an unlucky person, haven't you? (『馬車』)

日本語では、現在の相手の身の上に焦点を置いているのに対し、英語では、これまでずっと不幸な目にあってきた、というこれまでの経過に的を絞っているのが分かる。もちろん日本語でも、「これまでずっと苦労してきたのね」といった表現は可能だが、厳密に見れば英語の現在完了形が過去からの経過と現在の状態の両方を包含できるのに、日本語では、現在の状態のみか(「不幸な方だ」)、これまでの経過のみ(「ずっと苦労してきた」)を表わすかいずれかということになる。「ずっと苦労してきて」現在は相変わらず苦労しているのか、それとも幸せになったのかは文脈から判断するしかない。

さらに次の相違は、やはり日英語の特徴を示すものである。

(16) a. 事務員が、この人の住所は？ とさくからわからぬと言った。

When the clerk asked me for his address, I told him I didn't know.

(「顔」)

b. が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼らも帰れない事は、勿論彼にもわかり切っていた。

But he knew, of course, that neither the wagon nor the men would be coming back until they had got to where they were going.

(「トロッコ」)

英語では、主文の主語が過去形ならば、従属節の時制はそれに一致して過去形になるが、日本語ではこのタイプの時制の一致は見られないのである。大雑把に図示すれば次のようになる。日本語では主節と従属節との時間関係が独立していると言える。

(16') b. [が、行く所までゆきつかなければ、トロッコも彼らも帰れない事は ][ 勿論彼にもわかり切っていた ]

[But he knew [that neither the wagon nor the men would be coming back until they had got to where they were going]]

日本語では、同じ箇所到现在形と過去形が入り乱れて現れるのも(16)に通じる現象だろう。

(17) a. 菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎という十三、四の倅がいた。勘太郎はむろん弱虫である。弱虫のくせに四つ目垣を乗り越えて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやった。その時勘太郎は逃げ路を失って、一生懸命に飛びかかって来た。向こうは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。

The west side of the vegetable plot adjoined the garden of the Yamashiroya pawnshop, where there lived a kid of thirteen or fourteen called Kantaro. Kanntaro was, of course, a coward. But, in

spite of this, he used to climb over the trellis fence and steal the chestnuts.

One evening I hid in the shadow of the gate and caught him at last. Having lost his way of escape, he flung himself at me with all his force. He was about two years older than me, and although he was a coward, he was strong.

b. そう，こうする内に喇叭が鳴った。教場の方が急にがやがやする。もう教員も控所へ揃いましたろうと言うから，校長に尾いて教員控所にはいった。広い細長い部屋の周囲に机を並べてみんな腰をかけている。おれがはいったのを見て，みんな申し合わせたようにおれの顔を見た。

While we were talking, the bugle sounded and pandemonium suddenly broke out in the direction of the classrooms. The headmaster said the teachers would now probably be gathered in the staff room and led the way.

The room was a wide rectangle, and the teachers sat at desks lined up around the perimeter. When I entered, they all, as if by a prearranged signal, turned to look at me as one man.

(『坊っちゃん』)

英語にも歴史的現在 (historic present) があるが，これは，過去の出来事を眼前に提示する効果を狙ったもので，過去を表現する手段としては例外的 (有標 [marked]) と言える。しかし，日本語では，(17a, b) にも見られるように，過去の出来事を表現する場合でも，特別な効果を狙うこともなく，ごく普通に現在形と過去形が交互に使われるのも珍しくないのである。これは，一つには，過去形だけを使うと文末の形が「た」の連続になるのを避けるためもあると思われる。例えば，実作者の立場から三島 (1959) は次のように言っている。

るくらいである。

「私はまた途中で文章を読みかへして、過去形の多いところをいくつか現在形になほすことがあります。これは日本語の特権で、現在形のテンスを過去形の連続の間にいきなりはめることで、文章のリズムが自由に変へられるのであります。日本語の動詞がかならず文章のいちばん後にくるといふ特質（倒置法を除く）によつて、過去形のテンスが続く場合には「...した」「...た」「...た」といふ言葉があまりに連続しやすくなります。そのために適度の現在形の挿入は必要であります」

英語では、文末が同じ形になることはないので、この種の配慮は不必要である。

## 5. 指示詞

これは人称代名詞とも関わる表現だが、日英語での類似点と相違点を二、三見ておく。

(18) a. あんな者、どこで泊まるやら分かるものでございますか、旦那様。

There's no way to tell where people like that are going to stay, is there, young man? (『踊子』)

b. 病院では、白い上っ張りの背の高い医者がその被害者の死を確認したあと

「口紅をつけてはいるがね、このひとはおとこだよ」と痰のからまった無表情な声で、皆に言った。

A tall, white-collared doctor examined the body and pronounced it dead.

"In spite of the lipstick, this was a male," he added in a strangled voice. His face was quite expressionless. (『幻影』)

(18a) では、日英語とも指示されている相手を馬鹿にした意味合いが含ま

れている点では同じである。(18b)では、まず、日本語では死者を「被害[者]」と人扱いしているのに、英語では“it”とモノ扱いしているのが目に付く。もちろん英語でも死者に愛情や敬意を感じていれば“he”や“she”で指すのは当たり前だが、日本語で「それ」とは言えないだろう。せいぜい「その死体」どまりではないだろうか。同じことは「このひと」を“this”と言っているところにも窺える。“This person”と言えば、「生きている人」をまず指すことになるからである(なお、日本語では「おとこだよ」と現在形になっているが、死んだ人間を指すときに英語では“was”と過去形にするのも義務的と言える)。

## 6. 比較表現

この表現も英語では比較「構文」としての形式を備えているが、日本語には形式としての比較構文はなく(「より若い」などの単語で表すことになる)、全体として比較を表す表現を使うことになる。

(19) a. たとい、あやまらないでも恐れ入って、静粛に寝ているべきだ。

The least you can do is be ashamed of yourselves and go to bed quietly.

b. 正直に白状してしまうが、おれは勇気のある割合に智慧が足りない。

To tell the truth, I have more courage than wisdom.

(『坊っちゃん』)

(19a)のような劣勢比較は日本語にはもともとない表現(「より少なく」とか「もっとも少なく」といった表現は本来の日本語にはなかったもので、現在でも不自然に響く)であり、(19b)を比較構文として表現する発想も日本語には薄いと言える。

## II. 発想と文化の比較

### 7. オノマトペア

オノマトペア (onomatopoeia) は Kozawa (1979) でも触れたように、まず、個別言語に関係なく生理的に共通な刺激依存 (stimulus-sensitive) タイプと、個別言語特有な構造をもつ刺激自由 (stimulus-free) タイプに分類できる。刺激依存タイプは生理的な反応だから、表記法は個々の言語ごとに特有なものであっても、一応は理解できるのが通例である。それに対して、刺激自由タイプはまったく個別言語特有の発想と表記法で表わされるので母語からの類推では理解できないのが普通である。

さらに、オノマトペアは物理的に存在する音声を真似た「擬声語」と、現実には存在しない音声をあたかもその音声が聞こえるかのごとく表現した「擬態語」とに分類できる。擬態語は個々の言語特有の発想と表記をするので外国人には本質的には理解できないものであるが、擬声語でも個別言語特有の音声形式に基づいて認識し、かつ表記するので日英語でも大きな相違が見られる。

#### 7.1 擬声語

まず擬声語の具体例をいくつかあげておこう。

- (20) a . 女が留金はずした。パチンと音がして旅行鞆の蓋が開き、中には子供がくの字型にうずくまっていた。

The woman snapped apart the clasp of the bag, which fell open.  
Inside, there was the body of a small child. (『幻影』)

- b . ふうと言って汽船がとまると、舢舨が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た

As the boat came to a stop with a deep blast of its whistle, a barge pulled away from the shore and made towards us.

- c . 次はぼんと音がして、黒い団子が、しゅっと秋の空を射抜くように揚がると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い煙が傘の



ように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。

Bang! Another rocket rose like a black dumpling, hissing into the air and seeming to cleave through the autumn sky. When it was directly over my head it burst, and streamers of green smoke arched out like the ribs of an umbrella and were then swept away into the depths. (『坊っちゃん』)

擬声語・擬態語ともに英語では(20a, c)のように動詞で表現するか、(20b)のように動詞の意味を含む名詞で対応させるか、それとも(20c)の“Bang!”のように、独立させて副詞(間投詞)的に表わすか、もしくは無視するか、のいずれかの方法をとることになる。日本語の擬声語にもっとも直接的に対応するのは“Bang!”の類であり、小澤(1998)に示したように多くの例もある。ただし、そこでも指摘したように、このタイプは幼稚に響くので、コミックや子供言葉に多く見られるとしても大人の言葉にはあまり見られないのも理解できるだろう。文学作品の英訳にはもとよりほとんど見られないと言ってよいだろう。必然的に英訳では動詞表現が中心になる。

「パチン」とか「ぼん」という類の「音」が物理的に聞こえることは間違いないとして、英語話者が同じに聞くとは言えない。音声としても「ぼん」と“Bang!”が同じだとは言えないことも明らかだろう。動物の鳴き声ひとつとってもこのことはよく分かる。鶏の鳴き声が、日本語では「コケッコ」、英語では“Cock-a-doodle-doo”，ドイツ語では“Kikiriki”，中国語では「東天紅」，などと言うことを思い合わせるだけで十分である。英語では、「パチンと音をたてて開ける」のは“snap apart”であり(逆に、これを日本語に訳そうとすればどうしても擬声語を使わざるを得ないことに注意)、「ばかりと割れる」のは「破裂する(burst)」ことである。

実際に物理的な音が聞こえるかどうかについて判断が微妙な場合もある。次の例を参照されたい。

- (21) a . 紙袋の中のセメントは石塊のように固まっていたが、まわりの部分が割れるとサラサラと床に山を作ってこぼれ落ちた。

Some of the cement had already set into hard lumps, but by dint of shoveling and flattening, he was at last able to form a little peak.

(『幻影』)

- b . ほとりと音をたてて朱塗りの箸が畳の上に落ちた。

The lacquered chopsticks I was holding made a small sound as they fell onto the tatami mats.

(「顔」)

- c . 突然ごろりと車輪をまわした。

Their combined efforts caused the wheel to turn with a sudden clank.

(「トロッコ」)

- d . 顔を赤くしたり、ばたばた追っかけて来たりすれば、なお困るじゃないか。

But I'd think you'd be even more embarrassed, turning bright red and then chasing after me.

- e . 駒子が簪をぶすりぶすり畳に突き刺していたのを、島村は思い出した。

He could see her stabbing at the mat with that silver hair-ornament.

(『雪国』)

厳密に観察すれば、これらの動作にはすべて何らかの物理的音声が生じているのは間違いないが、それを言語表現として認識するかどうかは個別言語の話者次第である。実際に(21a, d)ではなんらの音声も翻訳されていない。英語でも「ピンの落ちる音が聞こえるほど静かだった(A pin might have been heard to drop)」という表現があるくらいだから、それよりも大きな箸が落ちる音が聞こえないはずはないが、どのような音をたてて落ちるか、に関しては英語話者の間で共通理解はないので、ここではただ「小さな音をたてた」と客

観的な描写をしているだけである。(21e)でも簪で髪を刺す音は聞こえるはずだが、“stab”自体には、刺したときに音をたてるかどうかは指定されていない(つまり、音を立てたときでも、立てなかったときでも“stab”が使える)。この動作の異常さは“stab”一語で伝わると訳者が判断したからそれ以上の擬声語を翻訳しなかったと思われる。

## 7.2 擬態語

擬態語にはさらに個別言語の特徴が現れている。そもそも、音声が存在しないところに音声を聞くという極めて抽象的な精神活動が行なわれており、日本語には英語に比べると、この擬態語があふれているのである。

- (22) a . (ひとりの女が) 赤い襟巻きをすっぽりかぶり、黒いスキー・ズボンの上に分厚い冬のコートをはおっていた。街を歩く人達がボカボカした陽気に汗ばみはじめていたというのに...

Her head was completely hooded by a red scarf, and she wore a thick winter coat over black ski pants. This in spite of the fact that everyone else on the street was beginning to sweat slightly in the warm sunshine...

- b . 何だか凄く可愛い人だった気がしますよ。ええ、ほっぺたのポチャポチャとした、色のとっても白い...

She was strikingly pretty. Deliciously chubby, and very fair-skinned...

- c . あの三十分の間、土埃でザラザラになった机の上の、水を一杯に注いだコップの縁を眺めながら、私は笑いとも怒りともつかない奇妙な感情を味わっていた。

During that hour, I just gazed at the glass of water which was on the dusty table in front of me, not knowing whether to laugh or cry.

(『幻影』)

- d . はじめ茂雄がつつかとその店に入ろうとしたので、朝子がしりごみして、...

Shigeo was about to walk boldly into the place, but Asako hesitated. (「声」)

- e . 雪の色が家々の低い屋根をいっそう低く見せて、村はしいんと底に沈んでいるようだった。

The white of the snow made the eaves look deeper still, as if everything had sunk quietly into the earth.

- f . したたか酔っているのに、駒子は険しい坂をしゃんしゃん歩いた。

Drunk though she was, she walked briskly down the steep hill.

- g . 子供なんざあ、二階からぼんぼん投げおろしているんだってさ。

Throwing children over one after another from the balcony, they say. (『雪国』)

- h . 今度は夢も何も見ないでぐっすり寝た。

This time I slept soundly, undisturbed by any dreams.

(『坊っちゃん』)

- i . しかし、仙人と一緒にいるものはたえずはらはらして生きていかねばならぬのだ。

However, people who live with a holy man find themselves in a continual state of suspense. (「機械」)

これらは、副詞か形容詞で日本語の擬態語に対応させている例であるが((22i)は名詞表現の例)、日本語の感覚的表現が、英語では記述的・客観的表現に変わっているのが見てとれる。

動詞で擬態語を表わしている例は文字通り枚挙に暇がない。

- (23) a . 彼は聞かぬ振りをしてどしどし山を下った。

He pretended not to hear and trampled on down the hill. (「御身」)

b . 踊子が一人裾を高く掲げて , とととと私について来るのだった。

(I could only hear their voices among the trees), except for the dancing girl, who was holding up her skirts and trudging along behind me.

c . 一町ばかりもちよこちょこついて来て , 同じことを繰り返していた。

She repeated the same words as she tottered along behind me for a hundred yards.

d . 踊子に早く追いつきたいものだから , 婆さんのよろよろした足取りが迷惑でもあった。

But I was eager to catch up with the dancers, and the old woman's doddering pace hindered me.

e . 踊子はちょこちょこ部屋へはいつて来た宿の子供に銅貨をやっていた。

The dancing girl gave a copper coin to one of the innkeeper's children who came toddling into the room. (『踊子』)

(23a-e) は , 歩き方の違いを擬態語で表わした日本語に対して , 英語ではすべて動詞の違いで対応させた例である。

同じように , 次の例は「落ち方」のいくつかである。

(24) a . 暗いトンネルに入ると , 冷たい雫がぼたぼた落ちていた。

Cold drops of water plopped inside the dark tunnel.

b . わけもなく涙がぼたぼた落ちた。

Inexplicably my tears fell.

c . 涙がぼるぼるカバンに流れた。

My tears spilled onto my bag. (『踊子』)

次は , 擬態語を様々な動詞で表現したものである。

- (25) a . 思いなしか , もう一度 , ぼくの顔をじろりと見て行ったようだった。

It may have been my imagination, but he seemed to turn and stare at my face.

- b . 身体はふるふる慄えた。

My body quivered violently. (「顔」)

- c . 四十女もぼつぼつ私に話しかけた。

Little by little, the woman, who seemed to be in her forties, began to talk to me. (『踊子』)

- d . 秋風が来ると , その羽は薄紙のようにひらひらと揺れた。

...the wings fluttered like thin pieces of paper in the autumn wind. (『雪国』)

これらは、実際に何らかの音が聞こえたというよりは、様子を示しているだけの表現だが、やはり様々な動詞で対応させているものである。

この点については井上(1984)が「オノマトペ」の章で興味深い指摘をしている(このオノマトペ論が出色のできればでもある)。つまり「日本語の動詞は弱い。そのままて用いると概念的になる。まだるっこい。的確さを欠く。動詞にはオノマトペという支えが要るのである」と述べて、たとえば「歩く」の内容を具体的にし、聴き手の感覚に直接に訴えたいときは「いそいそ、うろろろ」から始まり「よろよろ、わらわら」まで43(この数は一例である)の擬態語からもっともぴったり来るものを選んで補強する、との指摘はこれまで見てきた日英語の対応関係をよく説明するものでもある。

次の諸例は実際に音が聞こえる場合である。

- (26) a . 私は肌に粟粒を拵え , かちかちと歯を鳴らして身顫いした。

It gave me goose bumps. My teeth clattered and I shivered.

- b . 鳥がとまる枝の枯葉がかさかさ鳴るほど静かだった。

It was so still I could hear the dry leaves on the branches rustle when they alighted. (『踊子』)

- c. 画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾の羽織を着て、扇子をぱちつかせて...

The art master looked the part. The coat he wore over his kimono was of the flimsiest, transparent silk, and he flapped at himself with a fan. (『坊っちゃん』)

これまでの分類に入らないものを少し追加しておく。

- (27) a. 良平はこの音にひやりとした。

A cold shiver ran through Ryohei at the sound. (「トロツコ」)

- b. ははん、男の連れがあったのか、とこちはぴんときた。

Humph, I realized that she was traveling with this guy.

- c. 誰にも挨拶せずに、ぷいといなくなったのよ。

Without a word to anybody, she just upped and left. (「顔」)

(27a, b) は比喩表現だが、英語では、(27a) ではイディオムで、(27b) では動詞で表わしており、(27c) では英語のイディオム (“up and V”: 急に思い立って~する) で対応させている。

## 8. 日本の事物

翻訳が難しいものの一つが、その言語が使われている国でのみ見られる事物をどう訳したらよいか、ということで、日本と英語圏の社会・文化・歴史の違いを考えると、欧米間での翻訳とはだいぶ異なる困難さが予測される。外国の事物を日本に取り入れるときは、たいていカタカナ語にするが、これで分かる人には分かるし、少なくとも日本語の一種であるカタカナ語で表記されれば分かった気にはなる。そのうちに、多くの人がかつた気になれば定着するし、不必要だったり日本語との折あいが悪ければ消えてゆくことになる。

日本文学を英訳する場合、日本語のまま取り入れれば分かる人にはそれでよいが(“tempura”, “sushi”, “tofu” の類がその例)、分からない読者の方が多いときはそれに英語の注釈を加えたり、最初から英語表現を考えたり、場合によれば省略したり、といった方法をそのつど原文と相談の上で考え出すことになる。以下いくつかの実例をあげて考えてみたい。

- (28) a . 幸い、薄暗い廊下には人影はなく、遠くの方からチンドン屋の音楽だけがのんびりと聞こえていた。

Fortunately, not a soul was to be seen in the gloomy passageway, and all that could be heard was the distant sound of street musicians advertising a shop.

- b . 部屋の中では、宗方豊子が茶筆筍から和菓子を一つ取り出し、楊枝の先で細かく切りながら口に運んでいた。

Back in her room, Toyoko opened the box of cakes and, removing one, sliced it carefully with a small bamboo knife.

- c . …年頃の女学生として大抵の生徒が制服と靴下だけは揃えていたのである。街ではまだもんぺ姿が見られた頃なのだ。

..but most of the girls in the senior classes, the nubile ones, wore their uniforms and black cotton stockings even though it was still a time of shortages and drab clothes in Japan. (『幻影』)

- d . 踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、他に長岡温泉の宿屋の印半纏を着た二十五、六の男がいた。

The dancing girl was accompanied by a woman in her forties, two older girls, and a man of about twenty-five, who was wearing a jacket with the insignia of Nagaoka Hot Spring.

- e . やはり芸人や香具師のような連中ばかりだった。

Naturally, they were all entertainers and carnival people.



- f . 女たちは太鼓や三味線を部屋の隅に片づけると、将棋盤の上で五目並べを始めた。

The girls placed their drums and samisen in the corner of the room, then started playing a game of “five-in-a-row” on a Chinese chess board. (『踊子』)

- g . 十四日の夜は家々の注連縄をもらい集めて来て、堂の前であかあかとたき火をする。

(Since the New Year was celebrated here early in February, the traditional straw ropes were still strung up over the village doorways) On the fourteenth the children gathered the ropes and burned them in a red bonfire before the snow palace.

- h . 突然擦半鐘が鳴り出した。

Suddenly a fire-alarm was ringing, with the special fury that told of an emergency. (『雪国』)

ここに見られる例だけでもいくつかのパターンが窺われる。(28c)の「もんべ」、(28d)の「半纏」は意味をとった意識であり、(28b)の「和菓子」と(28e)の「楊枝」は、英語文化圏の事物に一応対応する英語があるものであり(だからこそ、英語圏の事物として受け取られる危険もある)、(28a)の「チンドン屋」と(28h)の「半鐘」は説明訳である。(28f)の「将棋盤」は現在なら“Japanese chessboard”もしくは“(Japanese) shogiboard”とするところだろう。日本の事物が世界に広く知られるようになるほど日本語のまま通用することが多くなるのも言うまでもない。例を付け加えておく。

- (29) a . 注文の中華そばができあがるまで、給仕女が、粗末な卓の上に置いていってくれたものだ。

While she was waiting for her order of Chinese noodles to arrive, the waitress had placed a copy on the rough-hewn table top.

- b . 臨雲峽に男女の心中死体が発見された。…奇巖と碧流から成っているこの仙境の溪谷は、また自殺や情死の名所でもあった。

..the bodies of two lovers who had committed suicide had been discovered in Rinun Gorge..This isolated ravine with its strangely shaped rocks and sparkling streams was a well-known spot for lovers' suicides.

- c f . 庄田咲次と福田梅子の情死事件に、潮田芳子が関係している

Yoshiko was clearly involved in Sakiji's and Umeko's double suicide. (「地方紙」)

- c . 駅前のおでん屋で一緒に飲んだ。

We had a drink together at a cheap bar by the station. (「顔」)

- d . 帰りに山嵐は通町で氷水を一杯奢った。

On the way back, Hotta treated me to a dish of fruit-flavored crushed ice in a part of town called Tooricho.

- e . 丸提灯に汁粉、お雑煮とかいたのがぶらさがって、提灯の火が、軒端に近い一本の柳の幹を照らしている。

The round lantern hanging outside announced that they served *shiruko*—red-bean soup with rice-cake in it—and *o-zoni*—vegetables and rice-cake boiled in soy.

- f . 村には観音様がある。

There is a statue of Kannon, the goddess of mercy, in this village.

- g . 柵屋の梯子段を登って山嵐の障子をあけると、おい有望と韋駄天のような顔は急に活気を呈した。

I climbed the stairs of the Masuya and slid back the *shouji* of Hotta's room. As soon as I walked in he shouted, "Hey! We have a chance!" His face, which I've said before reminded me of the

monstrous guardian god Idaten, had suddenly become animated.

(『坊っちゃん』)

(29a)の「中華そば」は、「そば」と「うどん」の区別がつかないのが難点ではあるが、一応このように訳されることになっているので、外国人読者にも近似値の意味は伝えている。(29c)の「おでん屋」と(29b)の「心中」は意訳である。(29d)の「氷水」、(29e)の「汁粉」と「雑煮」、(29g)の「韋駄天」が説明訳になっているのは当然で、外国人の読者には説明なしでは理解できないものだろう。

## 9. 日本語的表現

これは、日本語のみに見られるか、または特に日本語的な表現と思われるものだが、その表現の意味そのものはもちろん外国語でも一通り伝えられるのが通例である。単語一語が外国語にはない(そのような発想・認識がそもそも存在していない)場合は当然あり、この場合はまず翻訳はできない(つまり、単語のレベルでは翻訳が不可能なものは珍しくない。物自体の場合も抽象的な発想などの場合も。たとえば「豆腐」や「わび」・「さび」など)が、文のレベルでは翻訳はしやすくなり、文章のレベルになれば外国語同士の翻訳は(つまり、誤解なく一通りの意味を伝えることは)ほぼ可能だといえるだろう。

以下扱うのは、日本語的な表現が文のレベルでどのように英語に移せるか、という例である。最初に、国民的作家と言える夏目漱石の『坊っちゃん』からの例をあげる。

- (30) a . 自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点したものらしい。甥こそいい面の皮だ。

It seemed that, as far as she was concerned, *her* master was, without doubt, the master of her nephew also. What a position for her nephew to be in !

- b . よけいな減らず口を利かないで勉強しろと言って、授業を始めてしまった。

I told them that they weren't going to have the last word with me, so they'd better shut up and get on with their work. Then I began the lesson.

- c . 宿直をして鼻垂れ小僧にからかわれて、手のつけようがなくて、仕方がないから泣き寝入りしたと思われちゃ一生の名折れだ。

I would never live down if it were known that I'd been made fun of by a bunch of snotty-nosed kids and cried myself to sleep because I didn't know what to do about it.

- d . 帝国文学も罪な雑誌だ。

*Imperial Literature* had a lot to answer for.

- e . 清は今に返すだろうなどと、かりそめにもおれの懐中をあてにはしていない。おれも今に返そうなどと他人がましい義理立てはしないつもりだ。

She hadn't thought of it as a temporary loan, nor had she ever been after my money, and I had no intention of returning it and making her feel as though I looked on her as a stranger.

- f . 巾着切りの上前をはねなければ三度の御膳が戴けないと、事がきまればこうして、生きているのも考えものだ。

But if I couldn't get three meals a day without stooping to the level of the scum who take a rake-off from pickpockets, I'd have to seriously think about suicide.

さすがに漱石だけあって、いかにも日本語らしい日本語を使って歯切れよくストーリーを展開させているが、これらの日本語の意味そのものを翻訳できないわけではないことも英訳から見えてとれるだろう。ただし、英語では意味その

ものは表現されているとしても、ほとんどごく当たり前の説明的客観描写になっており、漱石のいかにも江戸っ子らしい「言葉自体の面白さ」はほぼ抜け落ちていく。

「日本語的表現の英訳」は、日本語の意味自体を正確に理解した上で英語として自然な表現に置き換える必要があるので、日英語比較の観点からのみでなく、日本語の理解と英作文（つまり英語の仕組）の向上という点からも有効だと思われる。例をさらに付け加えておく。

(31) a . ビールを注ぎながら、流し目をくれて笑った。

As she poured his beer, she looked at him coquettishly and smiled.

b . 逆恨みかもしれません。夫にすまないのは、わたしのほうでした。

I might have been transferring my own guilty feelings to him, since  
I was the one who had done wrong. (「地方紙」)

c . それ見る。それが宮仕えの悲しさだ。

Look, it's all part of society's game. (「声」)

d . まあ！ 厭らしい。この子は色気づいたんだよ。アレアレ。

My goodness. She's started thinking about the opposite sex. How  
disgusting! Look at that! (『踊子』)

e . 九州から昨夜の汽車に乗り、今朝着きました、と彼は律儀そうに言うであろう。

He politely explains that he has taken the night train from Kyushu  
and arrived this morning. (「顔」)

(31a, b, d) は、英語的発想から見た説明訳であり、(31c) は、人生の様々な活動を“game”ととらえる英語社会（例えば The Beatles の“Yesterday”では“Love is such an easy game to play.”と、恋愛を“game”ととらえている）の見方であり、(31e) は、「律儀」という概念自体が英語では見出しにくいものである。ここでの“polite”や、“honest, faithful,”などはどれも的を射ている

とは言えない。例をさらにあげておく。

- (32) a . 待つということがもう生き甲斐になってしまっている。そんな皆の生き甲斐を、いっぺんに奪ってしまうようなことが出来るだろうか。

Perhaps, it was better for Keiko never to know, for she had based her life on the hope of seeing her child again some day. Could she destroy Keiko's illusions? (『幻影』)

- b . 死んだって、始まらない。

Nothing will come of dying.

- c . まア、獣だって、あたし、これでも奥さんよ。

An animal, indeed. Let me remind you that I am still a married woman.

- d . 看病看病って、あなたは二言目には看病を持ち出すのね。

You're always on about nursing, nursing. You bring it out every other word. (『馬車』)

- e . 汗水たらして皆が働いたものを一人の神経の弛みのため尽く水の泡にされて了ってそのまま泣き寝入りに黙っているわけにもいかず...

...although when it's money everyone's sweated their guts out to make and it simply evaporates because someone's been idle, you don't much feel like simply creeping into bed and choking back your silent tears:

- f . 細君というものはまた目先のことだけより考えないに決っているのを思うと私もどうかして主人のためになるように...

...and since she was someone who couldn't see any further than her nose, I thought I must do something about it for him... (『機械』)

(32a, b, e) は説明訳であり、意味は十分に伝わっている。もっとも

(32a) の二度目の「生き甲斐」を“illusions”と身も蓋もない訳にしているところは語り手の視点をとったためだろう。(32c)の「これでも」は簡単な言い方ながら日本語らしい表現で、『プログレッシブ和英中辞典 第三版』(小学館, 2002)では“Though I may not look it”と、より原意を生かした言い方をあげている。“Let me remind you”もここでは適切と言える。(32f)は、日英語のイディオムの発想の一部が異なっている(「目」と「鼻」の違い)ものである。同じことは(34a)にも言える。

最後に一つ別種の例を考えておきたい。

(33) a . 失礼ながらご旅費として為替を同封しておきます。

Please accept the enclosed money order for your transportation.

(「顔」)

b . 前略。目下甲信新聞に連載中の小生の小説「野盗伝奇」をご愛読くださっている由、感謝いたします。今後もよろしく。右お礼まで。

I would like to express my appreciation for the interest you have shown in my novel *The Romance of the Country Bandit*, which is being serialized in the *Kashin News*. I look forward to your continued support.

(「地方紙」)

まず、(33a)に見られるように、相手に何かをあげるときに日本語では「失礼ですが」と言うが、英語にはこのような発想がないのである。好意を含めた贈り物を相手に渡すときに謝る必要はそもそもなく、気に入ってもらえたら嬉しいと思うのが自然な発想なのだが、日本人は、このような場合でも申し訳ながるという因果な国民性の持ち主なのである。英語ではただ“Please”をつけるなどすれば足りる。

また、手紙を書くときに「前略」などという余計なことばは言わずに、すぐに用件に入るのが英語の形式であり、「よろしくお願いします」という表現も実に日本語的で、もちろん英語に直訳することはできない。英語では、個々の

場合に合わせて適切な表現を考えないといけない。(33b)では、今後も読んでほしい、とはっきり言う必要がある。「右お礼まで」もこの場合はしいて繰り返す必要はない(場合によれば“Thank you again.”の類はあるが)。

## 10. 比喻表現

比喻表現も、原理的に必ず外国語に置き換えても理解されるとは限らないものである。人情は東西変わらないとも考えられるし、「説明」すればかなりの程度まで外国語の比喻も理解できることも事実だと思われるが、発想や表現法が違っている方がむしろ当たり前と思ったほうがよいだろう。そこに難しさと面白さがある。

### 10.1 直喩

直喩 (simile) は比較されるもの同士に共通項を探す作業が求められるものだが、ここにも文化の違いが見てとれる。

(34) a . 中学と師範はどこの県下でも犬と猿のように仲がわるいそうだ。

I heard that a middle school and a normal school in any prefecture  
are like cat and dog. (『坊っちゃん』)

b . トンネルの出口から白塗りの柵に片側を縫われた峠道が稲妻のように流れていた。

The mountain road, stitched on one side with white-washed  
pickets, coursed down from the mouth of the tunnel like a jagged  
lightning rod.

c . 若桐のように足のよく伸びた白い裸身を眺めて、私は心に清水を感じ、ほうっと深い息を吐いてから、ことこと笑った。

When I gazed at her white body, legs stretched, standing like a  
young paulownia tree, I felt pure water flowing through my heart. I  
breathed a sigh of relief and laughed out loud.



- d . 二重瞼の線が言いようなく綺麗だった。それから彼女は花のように笑うのだった。

The curve of her double eyelids was unspeakably lovely. Next was her flower-like smile. (『踊子』)

- e . 頭の中はいろいろな考えが、藻のように、もよもよと浮動していた。

These thoughts in his head were churning around like a bunch of seaweed tugged this way and that by the current.

- f . 杉本隆次は、危険な期待に、神経が針のようになっていた。

Sensing danger, Ryuji's nerves were all taut. (『地方紙』)

- g . この撮影が上がって封切られる日が近づくとすると、よからぬ黒い雲がひろがってくるような落ちつかなさを感じる。

When they told me that the filming will be wrapped up soon, apprehension swept over me like a black, malevolent cloud. (『顔』)

このような直喩が直訳して英語話者に理解できるかどうか、理解できないとすればどのような表現に置き換えて英語として自然な表現にするか、がポイントとなる。(34a)は「犬猿の仲」が英語では“cat and dog”になるよく知られた例であり、(34c, d, g)は英語の対応表現をあてたものである(paulownia treeは勿論一般に広く知られているわけではないが、文学的比喩表現としては十分理解できる)。(34e)は理解を確実にするために“tugged~”以下の説明が付け加えられている。(34c)では「稲妻」を「避雷針(lightning rod)」としているが、訳者が意識的にしたものであれば、静止している道を指すのなら動きのない避雷針の方がふさわしいと考えたものと思われる。例を付け足しておく。

- (35) a . その細君の睨みの留守に脱兎の如く脱け出してはすっかり金銭を振り撒いて帰って来る男と云うのもこれまた一層の人気を立てる材料

になるばかりなのだ。

..and whenever he got a respite from her overseeing eye he'd be off like an escaped rabbit, scattering money in all directions like someone back from somewhere, and that sort of thing only increased his popularity that much more. (「機械」)

- b . 硝子戸は終日辻馬車の扉のようにがたがたと慄えていた。

All day the glass windows shook and rattled like the door of a horse-drawn cab.

- c . 彼と妻とは、もう萎れた一对の茎のように、日々黙って並んでいた。

So they waited together, two linked stems of a flower that is dying, every day in silence.

- d . 渚では逆巻く濃藍色の背景の上で、子供が二人湯気の立った芋を持って紙屑のように坐っていた。

Down on the beach two children sat like scraps of paper, steaming potatoes in their hands, against a background of deep, surging blue.

- e . 彼は海浜に添って、車に揺られながら荷物のように帰って来た。晴れ渡った明るい海が彼の顔の前で死をかくまっている単調な幕のように、だらりとしていた。

Along the seashore, swayed in a carriage like a piece of luggage, he went home. The bright, glittering sea lay loosely before him, a monotonous curtain concealing death. (「御身」)

- f . 上田ちか子は、毎日毎日男の帰りを待つという一つの型を繰り返しているのにすぎなかった。蝉の抜け殻のようなものであった。

The preparations for his return had become a daily ritual for Chikako, a reminder of his past presence as real and yet as remote

as the sloughed-off skin of a snake one finds by the side of a road.

(『幻影』)

g. 冗談も度を過ぎればいたずらだ。焼餅の黒焦げのようなもので誰も誉め手はない。

A joke's a joke, but when you take it too far it becomes mischief.

Proportion is the rule in all things. If a joke goes to malicious bounds, or if, for example, admiration turns to jealousy, nobody can stomach it. These things are like rice-cake, which is delicious toasted but horrible if it's too burned black.

(『坊っちゃん』)

文学表現ということを考えれば、(35)の例はすべてそれなりに理解できるとしてよい。(35d)の“like scraps of paper”は英語としてはいくらか変わった表現だが、日本語自体が珍しい言い方なので直訳で十分理解できる。(35f)は日本語の「蝉」を“snake”という馴染みのあるものに変えており、(35g)は、これだけ説明しないと「焼餅」の比喩的意味がよく伝わらない例である。

## 10.2 暗喩

暗喩 (metaphor) の仕組は、たとえば安井 (1878) に詳しいが、要するに、日本語における「Aのアイコンを一義的に特定してBのアイコンに結び付ける」操作が日英語それぞれの暗喩のペアで可能か、不可能か、それがきわめて難しければどのような(英語として意味の通じる)表現に置き換えるか、が問題となることも言うを待たない。まず、日英語で(ほぼ)同じに理解される例をあげておく。

(36) a. 坂道を走った息切れと驚きで、「ありがとう」という言葉が咽にひっかって出なかったのだ。

The words “thank you” stuck in my throat. I was out of breath from running up the road and from my astonishment.

(『踊子』)

- b . 神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆へ出たような気がした。

We took a train straight through from Kobe to Tokyo, and when we reached Shimbashi Station we felt that we were at last back in the world after a spell in prison. (『坊っちゃん』)

- c . ぼくは空想が先走りする性質のようだ。

I'm the kind of person who lets his fantasies get ahead of him. (「顔」)

むしろこちらのタイプの方が少ないことは明らかに思われる。似ているようでも、実際には微妙に日本語と英語は表現法が違っているのである。次の例を参照されたい。(37a)は「翳る」のが「忍び寄る(creep over)」になり、(37b)では「裂ける」のが「粉々になる(shatter)」と、日本語の強調した表現が英語でも生かされており、(37c)では「しみ溶ける」のが「満たす(fill)」にされ、(37d)では「折れる」のが「(希望・計画などを)挫く(dash)」に置き換えられている。

- (37) a . が、同時にある冷たい不安が胸を翳った。

But at the same time a certain feeling of uneasiness crept over me. (「顔」)

- b . ちょっとでも動くと空気が裂けそうだった。

It seemed that if anyone had moved so much as an inch, the air would have shattered.

- c . この冬には珍しい暖かな陽ざしが、高地の澄んだ空気の中にしみ溶けていた。

...and an unusually warm winter sunlight filled the clear highland sky. (「地方紙」)

- d . 峠の婆さんに煽り立てられた空想がぼきんと折れるのを感じた。

The daydream that the old woman at the pass had sparked in me  
had been dashed. (『踊子』)

次の例は、はっきり表現自体が異なっているものである。

(38) a . 芳子の心に風が吹き荒れていた。

A cold wind chilled her heart (『地方紙』)

b . 疑惑が凶暴な力でおれの頭を殴った。

I was seized by a horrible realization. (『顔』)

c . 箱根の向こうだから化物が寄り合っているんだと言うかもしれない。

She, as a Tokyoite, would probably have said that the place was a  
den of thieves because it lay beyond Hakone. (『坊っちゃん』)

(38a) では、心の中に風が「吹き荒れる (is raging)」と言えば怒りが渦巻くことになるので、芳子の気持ちを察して「心が冷える」ことにしており、(35b) の「疑惑が頭を殴る」は作者がここでだけ通用するように発明した表現であり、また (35c) で「化け物が寄り合う」を「ワルプルギスの魔女の集会」のように訳したのではおどろおどろしすぎるので、清の心配の程度に合わせて「泥棒」で間に合わせたとと思われる。

#### 11. 女ことば・丁寧表現・方言

日本語では女ことばが体系的に使われるが、英語では基本的に女ことば独特の形式はない、ということはよく知られている。Lakoff (1975) が指摘しているように、英語でも女性が特に好んで使う単語や構文・イントネーションはあるが、体系的なものではない。日本語の女ことばがどのように翻訳されているかを見ると、ほぼ全て無視されていることからこの間の事情は明らかだろう。具体例を参照されたい。

(39) a . あんなに大きく見えるんですもの。いらっしやいませね。

See how big it looks. Please do come. (『踊子』)

b. ね、あそこにもラッセルがいるわ。

Look, a snowplow. (『雪国』)

日本語を見れば、どちらも発話者は女性だということはすぐにわかるが、英訳を見てもこれが女性の発話だとはわからない。英語ではどうしても、“she said” とか “he said” と注釈をつけないといけない。

丁寧表現のない言語はないと思われるが、日本語のように敬語体系が存在している場合は、敬語が体系的に存在しない英語に翻訳するときは落差が生じるのもまた予想されるところである。

(40) a. どうしよう。今夜はもう止しにして遊ばせていただくか。

What do you think? Shall we forget about it and have a good time instead? (『踊子』)

b. ねえさんはあなたのこともよく知ってた。いらしたわねって、きょうも言ってくれた。

Kikuyu knew about you. She told me today you were here.

c. あんた、やっぱりひげをお伸ばしにならなかったのね。

You didn't grow a mustache after all. (『雪国』)

d. 「イナゴは温い所が好きじゃけれ、大方一人でおはいりたのじゃる」  
「馬鹿あ言え。バツタが一人でおはいりになるなんて バツタにおはいりになられてたまるもんか」

“Locusts like warm places. They probably crawled in by themselves.”

“Don't talk rubbish! Grasshoppers don't just waltz their way into beds by themselves.” (『坊っちゃん』)

これらは全て敬語表現を無視して訳している例である。次は、何らかの配慮をしている例である。

- (41) a . おや、旦那様お濡れになっていらっしやるじゃございませんか。こちらで暫くおあたりなさいまし。さあ、お召物をお乾かしなさいまし。

“You’re all wet, aren’t you, sir?” She spoke with great deference.  
“Come in here for a while. Dry your clothes.”

- b . この方はお連れになりたいとおっしゃるんだよ。

This young gentleman has kindly offered to accompany us.

(『踊子』)

どちらかと言えば、敬語表現を無視して訳している場合の方が多くのように思われるが、(41a, b) に見られるように、様々な形で丁寧さを表わすことはもちろん不可能ではない。“sir” や “ma’am” などの呼びかけを使ったり、“please” をつけたり、(41a) のように、地の文 (“She spoke with great deference.”) で説明を加えたり、(41b) のように副詞 (kindly) や動詞 (offer) で丁寧さを表現する場合もある。

方言の翻訳となると、これはほぼ不可能だと思った方がいい。日英語ともに方言は多いが、日本語の関西弁を英語の南部方言に訳してもあまり意味はないだろう。実例でも方言を何らかの工夫をして英訳していることはまずない。

- (42) a . もうじき綺麗な花が咲くえ。あれ餅躑躅え。葉がねばねばするわ。  
ああしんど。

And it’s just about to flower, too. That’s the best kind of azalea,  
the one with sticky leaves. Gosh, I’m exhausted. (「御身」)

- b . 「まだ早いやろうけど、えろう腹空いた。ぼんより先に晩飯食べさせてんか」

「今お上がりしたところやおまへんかいな」

“It’s still too early, but I’m awfully hungry. Are you feeding me  
supper before the boy?”

“I think he just got out of the bath , ” Omiyo said. (「日記」)

c . そら来たと思いながら , 何だと聞いたら , 「あまり早くて分らんけ  
れ , もちっと , ゆるゆるやって , おくれんかな , もし」と言った。  
おくれんかな , もしは生温るい言葉だ。

“Here we go,” I thought, but aloud I said, “Yes, what is it?”

“You’re speaking too fast. I can’t understand what you say. If it’s  
the same to you, could you speak just a bit more slowly, like?”

“ “If it’s the same to you? ‘Like’? What kind of spineless language  
is that?” (『坊っちゃん』)

(42c) では 'like' で方言らしき訳をしているが , この一語だけでは方言だけ  
で話している生徒の翻訳として不十分なのは言うまでもない。なお , (42b)  
の “I think he just got out of the bath.” は , “You already had supper, didn’t  
you?” の誤訳である。

## 12 . 和製英語

日本語に外来語 (カタカナ語) が多いのはよく知られているし , その理由に  
ついては色々論じられているが , 実際面から特に気をつけなければならない  
のは和製英語を本当の英語だと思ってそのまま使ってしまうことである。原語  
とずれが生じる理由もいくつかあるだろう。以下 , 具体例を見ながらそのあた  
りの事情を考えてみたい。

(43) a . 「お早うございます」とマスターや朋輩やボーイたちに言う。…肥  
えたマダムが , 美容院からもち帰ったばかりの髪を皆にほめられな  
がらはいってきた。

She greeted the manager, the other hostesses, and the waiters ,  
when the fat proprietress arrived, just back from the beauty parlor,  
everyone was quick to praise her new hairdo.



- b . ハترون紙の帯封の上に、潮田芳子の名前と住所がガリ版で印刷されてある。月ぎめの読者なのである。

As Yoshiko was a regular subscriber, her name and address had been mimeographed on the brown wrapper.

- c . そのボックスに行ってみると、四十二三の髪の長い小太りの男がひとりですわっていた。

A long-haired, plumpish man in his early forties was sitting alone in a booth. (「地方紙」)

- d . しかし、何でも出演料(ギャラ)は四人くらいで百三十万はくれるらしい。

They'll be paying around one million three hundred thousand yen for the four of us.

- e . 数カットしか出ない脇役だがね。ぜひ君にという話なのだ。

Your part is a small one, with only a few scenes, but he insists on using you.

- f . 信じられない境遇が、確実なピッチでぼくを迎えにきているのだ。

Incredible things were happening to me at an amazing speed.

(「顔」)

すぐに和製英語だろうと判断できるものもあれば、うっかりすると本当の英語だと思ってしまうものも、由来をたどるのが現在では難しいものもある。上記の例で少し見ておこう。(43a)の「マスター/ボーイ/マダム」が和製英語なのは言うまでもないし、(43c)の「ボックス」も同じ。(43b)の「ハترون紙」はオランダ語“patroonpapier(模様紙)”から来たものであり、「ガリ版」は原紙を切る「ガリガリ」という音から来たものである(『集英社国語辞典』1993)。後者は“mimeograph(謄写版)”と言わないともちろん通じない。(43d)の「ギャラ」は“guarantee(映画などの出演料)”の日本語式省略語

である。(43f)の「ピッチ」は“pitch(ねじ一回転で進む距離)”が原意であり、漕艇で言う「ピッチを上げる=回転数を上げる」が日常語に入ったものと思われる。(43e)の「カット」は、映画などで監督が「カット!」と言って撮影カメラを止めさせるところから、「そこまでに撮影された場面」の意味にとられたものだろう。類例を追加しておく。

(44) a . ね, あそこにもラッセルがいるわ。

Look, a snowplow. (『雪国』)

b . 彼女はいつも擦り切れたズックの運動靴をはいていた。

She always wore an old pair of canvas shoes with rubber soles.

c . 八時少し前に、教祖がこの前と同じ黒のダブルの背広で赤い袴の矮小の巫女とあらわれると、人々は吐息と共に頭を下げて教祖を迎えた。

At just before eight, the priest appeared, dressed as before in a black double-breasted suit and accompanied by the medium in her red ceremonial priestess' skirt. (『幻影』)

(44a)の「ラッセル」は“Russell's snowplow”の米国の発明者の名前だけを残したものであり、(44b)の「ズック」はオランダ語の“doek(布)”から来たものである(『集英社国語辞典』1993)。(44c)は“double-breasted (suit)”の日本語式省略語である。(43d)の「ギャラ」や「ヘリ(“helicopter”の略語。英語では“copter”と省略される)」などのように、外国語を日本語式に省略することは珍しくなく、原語の理解を難しくしたり、外国人が理解しにくい原因にもなっている。

### 13. 身振り・諺

この両者についても少し扱っておきたい。まず身振りの例を。

(45) a . この問いをうけて、隆治は目を細め、遠くを見るような瞳をした。

In response to her question, Ryuji narrowed his eyes and stared as if he was looking off into the distance. (「地方紙」)

- b. 赤シャツが送別の辞を述べ立てている最中、向こう側に坐っていた山嵐がおれの顔を見てちょっと稲光をさした。おれは返電として、人差し指でべっかんこうをしてみせた。

Right in the middle of Redshirt's speech, Hotta, who was sitting opposite me, telegraphed what he thought of Redshirt with a flash of his eyes. I signaled my agreement by pulling my lowered eyelid down with my index finger. (『坊っちゃん』)

「目を細める」と言えば、何かに集中する 喜びや満足を表現する、のいずれかの意味で使われることが多いが、英語で “to narrow one's eyes” と言えば、 の意味が 疑惑・不信などを表現する、の意味で使われるが、むしろの意味で使われることのほうが多い。(45a) は と のどちらで受け取るかが日英語話者でずれる可能性が高い (cf. 小林 (1991))。また、「べっかんこ」は英語にはないので (45b) のように “I signaled my agreement.” とその意味を説明する必要がある。

諺の例をあげておくが、これは、日英語それぞれが慣習的に使うことわざで訳す場合と、より原文の前後関係に合わせて意識する場合がある。

- (46) a. 人は見掛けによらないものだな。

You can't go by appearances, can you? (『坊っちゃん』)

- b. それは、それは、旅は道連れ、世は情。

Well, well. As the old saying goes, “On the road, a traveling companion; and in the world, kindness.” (『踊子』)

(46a) は “Appearances are deceitful (deceptive)” というよく使われる諺があるし、(46b) には “When shared, joy is doubled and sorrow halved.” があがっているが (cf. 大塚高信・高瀬省三 (編集) 『英語諺辞典』三省堂, 1976),

前者はこの諺でもよいが、(46b)に後者の諺を使っても全く日本語の諺で表わされる意味合いは出ないだろう。

#### 14. 皮肉・しゃれ

皮肉は小澤(1982)でも触れたように、皮肉だと解釈できる感受性が必要であり、感性に欠けると文字通りに受け取ってしまうことにもなる。これは英語でも同じであり、皮肉として使われる慣用表現を心得ておくことと、前後関係から皮肉だと理解できる感性を磨いておくことがポイントだろう。

(47) a . 考えてみると厄介な所へ来たもんだ。

When you come to think of it, I'd really picked a great place to live in.

b . 「それじゃ、まだ釣りの味は分らんですな。お望みならちと伝授しましょう」とすこぶる得意である。だれがご伝授をうけるものか。

“Well, then,” he continued, “you don't really know about the joys of fishing yet, do you? I'll teach you, if you like.” He seemed highly delighted, but I had no desire whatsoever to be taught.

c . 気狂いが人の顔を撲りつけるのは、撲られた人がわるいから、気狂いが撲るんだそうだ。ありがたい仕合わせだ。

So, apparently, if a lunatic hits somebody over the head, it's that person's fault and not the lunatic's. Thanks very much!

(『坊っちゃん』)

(47a)の“great”は皮肉として使われることがあり(“fine”も同様に使われる)、“Thank you.”にも皮肉の用法がある、といったことも英語理解の基本的知識に含まれる。(47b)の「ご伝授」は、英訳では皮肉の意味合いが全く消えている。ここでも皮肉として“Thank you.”が使えるだろう。

しゃれはことばだけの問題ではなく、その言語の文化・社会の知識が関わっ

てくるので、翻訳はきわめて難しい。翻訳の腕を見せる最右翼と言えるだろう。しゃれの得意な江戸っ子作家の漱石からいくつか例をあげてみよう。

- (48) a . 部屋へ帰って待っていると、夕べの下女が膳を持って来た。盆を持って給仕をしながら、にやにや笑ってる。失敬な奴だ。顔の中をお祭りでも通りゃしまいし。

The same maid as on the previous evening brought my breakfast. While she was holding the tray and serving me, she kept grinning in an unpleasant way. Anyone would think I was a freak in a sideshow! Peasant!

- b . ゴルキが露西亜の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のなる木が命の親だろう。...おれのような数学の教師にゴルキだか車力だか見当がつくものか。

So what? Gorki's a Russian writer. Maruki's a photographer at Shiba, and if people were honest you wouldn't need *any* kind of "key." ..and being a teacher of mathematics, I hadn't the faintest idea what the difference between Gorki and Turkey was.

- c . バッタだろうが雪駄だろうが、非はおれにある事じゃない。

Grasshoppers or clodhoppers, I wasn't the one to blame.

- d . まったく済まないね。今日様どころか明日様に明後日様にも、いつまで行ったって済みっこありませんね。

You're quite right. It's an insult to the god of today, tomorrow, the day after tomorrow, or any other day for that matter.

- e . 発句は芭蕉か髪結床の親方がやるもんだ。数学の先生が朝顔に釣瓶をとられてたまるものか。

Haiku are for Basho or dilettantes with plenty of time on their hands. There's a poem which talks about morning-glory creepers

entwined about the rope of a well-bucket. Well, you won't catch a mathematics teacher becoming entwined with haiku like that.

f . 「そりゃああなた，大違いの勘五郎ぞなもし」

「勘五郎かね。だって赤シャツがそう言いましたぜ。それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺右衛門だ」

“Ah. That, you see, is where you're very much mistaken. That's a different kettle of fish.”

“Is it? But I just heard it from Redshirt. I don't know about fish, but if I *am* mistaken, Redshirt's the mother and father of all cock-and-bull stories.”

g . 太宰権帥でさえ博多近辺で落ちついたものだ。

There was a famous public official in the ninth century, Sugawara Michizane, who fell into political disfavor and was sent into exile — but only as far as Hakata. (『坊っちゃん』)

ここで見られるように，漱石の皮肉は全くと言っていいほど英訳には移されていない。(48a)は一種の説明訳になっている。(48e, g)は由来の説明になっているが，この説明がなければ，しゃれ以前に意味そのものが伝わらないだろう。(48d)はほぼ直訳だが，英訳ではほとんど意味が伝わらない(日本語の意味自体がはっきりしているとも言えないが)。(48b, c)の言葉遊びも不発に終わっている。(48f)では“different kettle of fish(別のもの)”や“cock-and-bull stories(嘘っぱち)”といった意味をとったイディオム相当句を利用してはいるが，原文の面白さは消えている。

しゃれの翻訳が，このようにいつも不可能に近いほど難しいばかりではないだろうが，意味を伝えればよいレベルとは違い，言葉遊びの世界は，いわばそれだけで充足しているものである。翻訳する必要が本来あまりなく，原語で味わうべきものだから，翻訳が極端に難しくなるのも当然と言える。

比喩表現の一部については同僚の Professor Kate Elwood のご教示を得たことに感謝したい。

## 参考文献

- 井上ひさし (1984) 『自家製 文章読本』(新潮社)  
 小林祐子 (1991) 『しぐさの英語表現辞典』(研究社)  
 小澤悦夫 (1982) 「ことばの表と裏(1)」『鶴見大学文学部紀要 第2部 第19号』  
 小澤悦夫 (1998) “An Incomprehensive Dictionary of English Onomatopoeia” 『文化論集 第13号』  
 国広哲弥 (編) (1980-82) 『日英語比較講座 全5巻』(大修館)  
 卷下吉夫 (1997) 「翻訳にみる発想と表現」 卷下吉夫・瀬戸賢一 『文化と発想とレトリック』(大修館, 1997) 所収  
 三島由紀夫 (1959) 『文章読本』(中央公論社)  
 サイデンステッカー・那須聖 (1962) 『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』(培風館)  
 サイデンステッカー・安西徹雄 (1983) 『日本文の翻訳』(大修館)  
 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』(岩波書店)  
 安井稔 (1978) 『言外の意味』(大修館)  
 Kozawa, Etsuo (1979), “Interjections in English” 『鶴見大学文学部紀要 第2部 第16号』  
 Lakoff, Robin (1975), *Language and Woman's Place* (Harper & Row)

## 引用作品

- 芥川龍之介 (1922) 「トロッコ」/ “The Wagon” Tr. By Dorothy Britton in *The Spider's Web and Other Stories* (講談社英語文庫)  
 川端康成 (1925) 「十六歳の日記」[日記]/ “Diary of My Sixteenth Year” Tr. by Martin Hoffman  
 川端康成 (1927) 「伊豆の踊子」[踊子]/ “The Dancing Girl of Izu” Tr. by Martin Hoffman in *The Dancing Girl of Izu and Other Stories* (Counterpoint, 1997)  
 川端康成 (1937, 38) 『雪国』/ *Snow Country* Tr. by Edward Seidensticker (Charles E. Tuttle, 1956)  
 松本清張 (1959) 「地方紙を買う女」[地方紙]/ “The Serial” Tr. by Adam Kabat  
 松本清張 (1959) 「顔」/ “The Face” Tr. by Adam Kabat  
 松本清張 (1959) 「声」/ “The Voice” Tr. by Adam Kabat in *Short Stories* (Kodansha International, 1989)  
 夏目漱石 (1906) 『坊っちゃん』/ *Botchan* Tr. by Alan Turney (講談社英語文庫, 1985)  
 戸川昌子 (1962) 『大いなる幻影』[幻影]/ *The Master Key* Tr. by Simon Grove (The Viking Press)  
 横光利一 (1924) 「御身」/ “Love” Tr. by Dennis Keene  
 横光利一 (1926) 「春は馬車に乗って」[馬車]/ “Spring Riding in a Carriage” Tr. by Dennis Keene  
 横光利一 (1930) 「機械」/ “The Machine” Tr. by Dennis Keene in *Love and Other Stories by Yokanitsu Riichi* (University of Tokyo Press, 1974)